

## 株式会社 池田竹店

1858年創業

戊辰戦争、太平洋戦争と二度の戦火を免れた清住通り周辺には、今も木造の日本家屋や大谷石の蔵などが残り、日光街道沿いの商業地として栄えた往時を偲ばせています。今回紹介する(株)池田竹店の創業は1858年。明治・大正・昭和、そして平成と時を経て清住通り沿いで商いを続けてきた老舗です。

## 過去に固執せず足元を見て、未来へと前進

創業以来約150年、(株)池田竹店は創業地である泉町で5代にわたって事業を継承してきました。現在の店舗兼住居は、昭和初期の建築。部分的に修繕を施しながらも、その佇まいは建築時の風格を留めています。

磨き込まれた太い柱や見事な建具が残る社屋と対象をなすのは、通りをはさんだ展示スペースに建つガラス張りのゲストルーム「コンサバトリー」。現社長・池田昌可さんの代になってから進出した外構工事・ガーデンニング部門で売出し中の商品です。

「コンサバトリーは、当社のフ

ラグジュアリーな商品。社名は竹店でも、こんな洋風の提案もできるということをお客さまにアピールするために建てました。これができるのなら、もっと違った仕事もできるだろうと、お客さまに当社のイメージを広げていただくのが目的です」と池田社長。確かに、風情ある通りに建つコンサバトリーは一際目立つ存在。外国映画に出てくるようなコンサバトリーが同社の商品と知って、その洋と和のギャップに驚くお客さまも多いそうです。

また、同社は現在、同じ展示スペースに並ぶウエルカムウォール

の開発・販売にも力を注いでいます。外構のポイントとなるウエルカムウォールはオーダーメイドが一般的で、製作には費用と時間がかかります。そこで池田社長は、安価で簡単に設置可能な汎

用性の高いウォールの開発に着手しました。スタイリッシュなコンクリート製のウォールに灯り窓を組み込んだり、微妙な曲線にこだわったりと、さまざまな工夫が凝らされています。「輸入材や人工竹の普及により竹の国内需要がどんどん減少している中、竹のみにこだわっている生き残れません。老舗は過去の商品や経営スタイルに固執してしまいがちですが、足元を見ながら、新しいことに向かっていくことも必要だと思います。事業の目的は継承ではなく、利益を上げて社員が生活していくことにあるのですから。元々うちには代々伝わる家訓や経営理念はないんですよ。そうやって笑う池田社長ですが、先代が拓いた道をただ踏襲するのではなく、自由な発想で新たな事業に向かうその姿勢にこそ、池田竹店に伝わる「商いの秘訣」が隠れているのかも知れません。

また、同社は現在、同じ展示スペースに並ぶウエルカムウォールの開発・販売にも力を注いでいます。外構のポイントとなるウエルカムウォールはオーダーメイドが一般的で、製作には費用と時間がかかります。そこで池田社長は、安価で簡単に設置可能な汎

用性の高いウォールの開発に着手しました。スタイリッシュなコンクリート製のウォールに灯り窓を組み込んだり、微妙な曲線にこだわったりと、さまざまな工夫が凝らされています。「輸入材や人工竹の普及により竹の国内需要がどんどん減少している中、竹のみにこだわっている生き残れません。老舗は過去の商品や経営スタイルに固執してしまいがちですが、足元を見ながら、新しいことに向かっていくことも必要だと思います。事業の目的は継承ではなく、利益を上げて社員が生活していくことにあるのですから。元々うちには代々伝わる家訓や経営理念はないんですよ。そうやって笑う池田社長ですが、先代が拓いた道をただ踏襲するのではなく、自由な発想で新たな事業に向かうその姿勢にこそ、池田竹店に伝わる「商いの秘訣」が隠れているのかも知れません。

その証拠に…昭和初期に撮られたという写真には、2代目と3代目を中心に屋号を染め抜いた半纏



昭和初期、浴剤「草津温泉の精」を売り出した時の写真。中央に同店の2代目、3代目が並び、左端にはチンドン屋一行が写っています。

をまとった従業員たちがズラリと並び、その後ろには社屋の2階まで届く大きなぼりが写っています。「浴剤界の大革命・草津温泉の精」の文字が示すとおり、当時池田竹店が売り出したのは、竹とはまったく関係のない入浴剤でした。写真から、チンドン屋を使い大々的に広告宣伝した様子も見取れます。宮の人々は大いに驚き、興味を惹かれたことでしょう。



清住通りに面した現在の店舗。

## 株式会社 池田竹店

(本店)  
宇都宮市泉町 8-27  
☎028-622-3834  
(URL)  
http://take-10.ftw.jp

※このコーナーは隔月で掲載します。



代表取締役 池田昌可氏。店舗前のスペースには、オリジナルのウエルカムウォールをはじめ、コンサバトリーなどが展示されています。